
マレピト来たりて 前編

安積

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マレビト来たりて 前編

【Nコード】

N0495BA

【作者名】

安積

【あらすじ】

典型的異世界トリップ……なんだろうけど、何でこの人たちがそんなに異世界人慣れしてるわけ？

数ヶ月という短周期で異世界から人やら何やらがやってくる世界に、何の因果かやってきてしまった日本人が、何とか順応しようと頑張って生きていく話。

同名投稿小説の、改行修正、分割話統合版です。第6章分までをこ

こちらにまとめていきます。内容は全く同じです。

序章

勢い込んで家を出た、初出勤のその日。

慣れないスーツに着られてる感は否めなくても、それでもやる気だけは一杯で。

意気揚々と家を出た。

ほんの少しの不安と緊張とそれに勝る多大な好奇心を胸に。

それなのに。

どうして私は一異世界　ここに　いるんだろう？

意外に落ち着いてるもんだよね。

ただの娯楽でしかなかったファンタジー小説もこんな風に役立つことがある訳か。

予備知識も何にもなしにいきなり異世界に来ていたらきつとパニックを起こしてただろう。

もしかして、昔から神隠しの話があったのってこういう現象に巻き込まれる人が実際にいたからなんじゃないだろうか？

となると、あくまで楽観的な予想に過ぎないけれど、場合によっては帰れることもあるわけで。

でも、逆に言えば万が一どころでなく低い確率だけど、ここから更に別の世界に行ってしまう様な可能性もある訳か。

二度あることは…とも言出し、とりあえずは帰れるかもしれないけどこの世界での生活の目的をつけることが重要かな？

となれば、まずは職探しか。

……結局、辛い就活から逃れられてもまた職探しな訳ね。
この世界にハローワークみたいなものはあるのかな？

異世界初日。

訳の分からぬままに保護された神殿で、空に浮かぶ7つの月に眩暈を覚えながらも、微妙に現実逃避をした脳は眠りという精神安定剤の補給に異議を唱えはしなかった。

何の因果か異世界に来て、早1週間が経過した。因みにこの世界での1週間とは6日のこと、1月は24日である。

まあ、それはどうでも良いが、何とか現状を把握し慣れてきたかな、といったところだ。異世界トリップものでは時たまあるバージヨンだが、この世界は「渡り人」に慣れているようだ。「渡り人」って言うのは私のような異世界からやってきた人々の事らしい。

別名「マレビト」。

これはこの国、アウトラーシェン周辺でだけ通用する言い方らしく、あまり一般的ではないのだそうだ。

話が逸れたが、何でも、毎年或いは数年に一度何処かしらには「渡り人」が現れるのだとか。しかもこの国だけじゃなく、他の国でもそうらしい。恐らく、この世界全体で見れば数ヶ月周期で渡ってくる人がいるのではないかと、私を保護してくれた神官が教えてくれた。しかも、やってくるのは一つの世界に限らないらしい。私と同じように地球から来る人もいれば、別な世界から渡ってくる人もいるとのこと。人に近い種もいれば、所謂獣人やら竜のような生き物である事も。人種の坩堝やサラダボールなんて比ではない。

ある人はまるでゴミの集積場だ、と自嘲気味に言ったらしいが。どうしてこんな事になっているのかは大分前に判明している。嘘か本当か定かではないが、かつて神託が下ったのだという。

曰く、この世界に必要でありそうな人材を見繕って集めているのだ、と。

世界で生まれた人たちも元を辿ればそうやって集められた人たちの子孫なんだとか。この神託を受けたのは特に信仰心が篤いというわけでもない、どこにでもいそうなおっさんで、神託を受けてからの開口一番の言葉が「余計なお世話だクソっ垂れ」だったと伝わっている。なんでも、神託が下る前年に新たにこの世界に落とされた

竜によって最愛の息子を殺されたばかりだったとか。

神と人間の価値観は違う。人にとってはふざけたことでも、神にとってはこの世界が完成するのに必要な処置だったという事だろう。今でこそもつと積極的にこの世界に関わりを持っていく神だけれど、このときはまだ意外と放置気味だったらしい。それにも拘らずこの話が信じられたのは、そのおっさんのように神なるものももし実在するならば確実に恨んでいるだろう人々を中心にその神託が下ったからだ。一人が言っただけならただの戯言でも、証人が複数いれば信用される。多くの証言者がいながら、何故かその中には一人も聖職者がいなかった。それ故、なぜ自分に託宣を下さらなかったのかと嘆いた聖職者も多くいたとか。

私が思うに、信心の篤い聖職者に神託を下したところで信憑性が薄かったり、変に歪められてしまうと心配したんじゃないだろうか。どことなく、この世界の神様は人間臭い気がした。とにかく、それらの証言の数々は神殿に集められ、一冊の本としてまとめられた。今では世界中の誰もが知っている内容だが、世界は変われども噂とは人の口に膾炙されやすいものらしく、実は公にされてない神託があるのだ、世界の終末の預言があるのだの様々な都市伝説も合わせて広まっているらしい。

この手の噂を最初に広めたのはアメリカ人の「渡り人」ではないかな、と思ったりするが、それは私の勝手な想像だ。でも、アメリカ人ってそういう政府陰謀系の都市伝説好きだよな。

まあ、伝聞が多くなったがそんな訳で「渡り人」たちはこの世界では当たり前前の存在なのだ。だから「渡り人」を迫害したり逆に優遇したりするような事はないが、普通に生活していこうと思えばそれほど困りはしないだけの制度作りはされていた。

「渡り人」が世界に必要な存在であると神から言われていることもあり、まずは何が出来るか、どのような知識や技術、能力を持つ

ているかという事が調べられる。そこで特別なものを見出されれば、研究機関やら何やらで仕事につく事も出来るが、そういう人物はあまり多くはない。大抵はギルドにて自分のできる仕事を斡旋してもらつ事となる。

そう、ギルドだ。

異世界トリップおよびファンタジー世界のファンが垂涎のギルドである。もしかしたらこの仕組みはゲームやラノベ好きな地球人が考えたんじゃないのか、と思うほどその手のギルドに良く似ている。間違つても、中世以後のヨーロッパでの商工会としてのギルドのあり方ではない。

何と言つるか、分かりやすく現代の言葉に直すなら職業斡旋所…といてもハローワークではなく、人材派遣会社とでもいった感じだろうか。そうあれだ、携帯ですぐ登録、週末には日雇いのバイトというグツ ウイ やらモ イトやらそんなのとよく似ている。

ギルドに登録したら、自分が請けることの出来る仕事の候補の中からやりたいものを選んで仕事に行き、仕事が終了したらまたギルドに戻って報酬を得る。安定した生涯雇用（バブル崩壊以後有名無実となつてはいるが）が当たり前だった現代日本人からすれば、職業に貴賤はないというものの、日雇い労働者というのはかなり心理的抵抗のある職業である。というか、そうならないために大学まで苦勞して通つて、就職難が叫ばれる中、それでも頑張つて内定を得て、何とか無事に卒業して、今日から初出勤！という日に異世界なんぞに落とされて、拳句に別段特出した能力もないようだから日雇い労働に甘んじろ、というのはハツキリ言つて、神がいるものなら極刑ものだと少なくとも私は思う。

それでも、生きてく為にはそれしか出来ない。この中世的世界、安定した雇用を得るにはコネと伝手が何よりの頼りなのだ。異世界からやってきたばかりの根無し草にそんなものはない。ギルドでコツコツと信用を溜め、誰か自分の能力を買ってくれる人を見つける

か、売り込んでいくしかない。

と、まあ。

異世界に落ちてきてから保護された神殿で、1週間くらい掛けて色々教えてもらったり調べられたりして現状を把握する事は出来た。短い時間ではあったが保護される期間は今日で終わり、明日からは私の身は神殿ではなくこの区域担当のギルド預かりになるらしい。結構無茶な話だと思うだろうが、これらは良くも悪くも私たちのためのことなのだそうだ。何も知らないまま放り出すわけには行かず、かといって長い時間保護してしまえば自立しこの世界に馴染む力をなくしてしまう。ある程度落ち着いて自分の状況を把握して、且つ自分で世界に踏み込んでいく力も持っている。その微妙なラインが凡そ1週間だったのだという。これは神々がある程度、順応性やある意味での凶太さをもった人間を選別しているからこそできることらしい。つまり、この世界に来てしまった私にとってはも凶太い神経の持ち主だという事を証明されたようなものである。これを言われたときは流石に少なからずショックを受けた。もしかしたら、この世界に来てしまったということ以上のショックかもしれない。

……恐らく、こういうところこそが私が選ばれてしまった所以の一つなのだろう。

明日、朝になれば私は神殿の庇護下を離れ、異界の地で自ら歩く術を身に付けていかなければならなくなる。当分、心休まる日はないだろう。こういうときは体力温存に限る、とばかりに異界の夜に浸るまもなくさっさとベッドに潜り込む。新生活への多大なる不安と若干の好奇心と興奮を闇は飲み込み、夜は静かに更けていった。

異世界生活7日目。

庇護下を離れ、自立生活を目指して活動するという意味では実質1日目とも言えるだろう。まあ、1週間というのはあくまで目安であって体調やら精神状態やら多くの理由で保護期間が長くなる人はそれなりにいるらしい。私ももう暫くいても良いのだと言われたけれど、一度甘えればきつと離れられなくなる、そんな自覚がしつかりあった。それに、本来であれば1週間前には新入社員として自立生活をスタートさせていた筈なのだ。例え異世界だとしても、私がすぐに働く道を選んだのはある意味当然の選択と言えただろう。

でも、本当の理由は……。

「本当に登録してしまっているのですか？」

ギルドへ向かう道すがら、この1週間私の保護官であった神官がしつこく尋ねてきた。そう聞かれてしまう理由は分からなくもなかったが、一度決めた事をグジグジといつまでも言われ続けるのは不快だった。

「もう、決めました。」

自然、言葉はそっけなくなる。

それでも、否^{いや}それだからこそか、強がっているように見えたのかもしれない。結局、ギルドへの長くはない道案内の間に15回も同じ質問が繰り返された。曰く、その年では仕事はまだ無理ではない

か、体力的に持たないのではないか、無理をしているのではないか、たった一人で食べていくのは難しい、もっと我々を頼れ、組織が嫌なら自分が個人的に面倒を見よう、否寧ろそれが良い、だのと。まあ、どれも丁重にお断りしたが。こんな暑苦しく押し付けがましい保護者は不要である。

暑苦しいとは言うものの、顔だけ見れば……ゆるく一つにまとめられた柔らかに波打つ稲穂色の長髪、瞳に映すは冬空の青、コーカソイドに近い色白の肌はムカつくくらいにつるつる、顔のパーツの形も配置も抜群、とくれば……まあ、間違まちうことなき美形であるう。もし私が男だったなら、確実に「イケメン死ね」とか思ったことだろう。「リア充爆発しろ」と、思うことはなかっただろうが。何せ性格が……これこそが所謂残念な美形と呼ばれるそれなのだと思う。

そんな美形に、たとえ多少しつこいとは言え見知らぬ世界でそんなに親切にされたらころつとオチてしまってもおかしくは無いとも思うのだが、彼に限ってそれだけは在り得ない。私を神の遣いとしてしか見ない相手に、どうして恋情など抱けるだろう？彼が私に優しくするのは、偏に私が神が遣わした「渡り人」だからである。それが分らないほど、私も愚かではないし、それを分つて尚甘える事ができるほど厚かましくも無ければ、この世界を受け入れていたわけでもなかった。

やがて静かになった神官を先導にギルドらしき建物へと到着する。見るからに過ぎた年月を感じさせる石造りの重々しい雰囲気建物だ。

「ここですか？」

すべての提案をすげなく断られたせいか幾分意気消沈して見える神官を見上げ、尋ねる。神官はまだ未練がましい瞳を向けてきたが、事ここに至ってはもう反対する気はないようだった。

「そうです、ここがエグザードナ地区のギルド本部です。」

そう言うと重厚な重い木製のドアを開き、私が入るのに続いて中へ入ってきた。どうやら私の登録が終わり、完全に神殿の庇護下を離れるまではついてくると決めているようだ。なんて過保護なのだろう。普通は道案内されたらそこで終わり、或いは場合によっては地図だけ渡されてそれで終わりという事もあるらしいというのに。それはそれで困るのだが、逆の意味でとんでもないのが保護官だったなと、後僅かで彼との縁が切れることを神ではない別の何かに感謝しつつ、気づかれないようにそつとため息をついた。

早朝と呼ぶほどではなくとも早い時間だからか、ギルドの中は閑散としていた。日本の日雇い労働のイメージだと、朝早くに仕事を貰って夕方帰ってくる、という生活パターンかと思ったのだが、どうやらギルド員たちの朝はそう早くないようである。それでも、少ないとはいえ奇異なものを見る複数の視線を寄せられている事は分かった。それらの視線の持ち主をやり過ごし、幹旋内容を記した掲示板やら、おそらく受付か換金用であろう窓口を通り過ぎ、階段を上り2階へ向かう。本当に、想像していた通りゲームや小説の中のそれにそっくりだ。「渡り人」は元の世界の時代を問わずやって来るらしいから、あながち私の予想は外れていないのだと思う。特に、この国は地球からの「渡り人」が多い事で知られているということだから。

通常、ギルドの登録は1回の窓口で行われるのだという。しかも地区内にあるギルドの各支部でも登録は可能だそうだ。本部よりも

窓口が込む事も少ないので、この近辺に居住しているものでもなければ、そちらで登録する者の方が多いようだ。

だが、唯一例外がある。

異世界からの「渡り人」だけは、その地区のギルド本部の上層部でなければ登録できないのだそうだ。それは時折、後になって能力を開花させる「渡り人」も少なくないため、その管理を行いやすくするようにという理由によるのだとか。更にはまだ世界に慣れない「渡り人」の援助をしやすくするための決まりでもあるそうだ。確かに、お互い顔見知りであった方が何かと便利だろう。

階上上がり、薄暗い廊下を進む。神殿や離宮もそうだったが、ガラス窓の少ない石造りの建物は総じて日中でも暗い。神殿はそれでも白い反射率の高い石を磨き上げて使っていたのでまだ少しは明るかったが、ギルドでは削り出しそのままの石を使っているのではおさらに暗く感じた。無骨な作りは威圧感も感じさせるが、恐らくはそういった効果をもたらすためではなく、経費面での理由故なのであろう。

まあ、それはさておき。

暗い廊下のその先には細かい装飾の施された大きな扉があった。そこがこのエグザードナ地区担当ギルドの中枢だった。

ノックの後、保護官が先入室する。

「神殿の者だ。先だって連絡した」渡り人」の登録に来た。」

入りなさい、と姿は見えないが、それなりに年の行った落ち着いた感じの女性の声が聞こえた。

「…………え？子供？」

入室を促す声に従って入った私の耳に一番に飛び込んできたのは、挨拶でもなんでもなく、気の抜けたようなそんな言葉だった。どつしりと重そうな執務機の向こうにいる女性も若干ビククリしている。だが、どうやら先の発言はその隣にいる秘書らしき若手の女性のものようだ。既に連絡は言っていたはずなのだから、そこまで驚かなくてもいいと思うのだが。

「部下が失礼を。けれど、言い訳になってしまいますが、話には聞いていたものの、これは驚くな、という方が酷というものでしょう。」

奥の執務机から初老の女性が立ち上がって声を掛けてきた。彼女がギルド長なのであるう、落ち着いた雰囲気、しかしそれだけではないだろうことを伺わせる独特の雰囲気的女性だ。

「御挨拶が遅くなり申し訳ありません。エグザードナ地区ギルド支部長のハーナン・エルドです。はじめまして、異界から参られし方。」

「はじめまして、”渡り人”アトルディアです。」

ギルド長からの挨拶に対し、未だ言い慣れぬ名を返す。当然、偽名である。というか、正確に言うならば字、名乗りの為の仮名といふべきか。この世界、否、この国はかつて言霊信仰が盛んであっために今尚その名残として真名信仰が強く残っている。そんな土地柄ゆえに、この国の出身者は本名を初対面の相手に教える事はまずな

いのだそうだ。

だが、どうやらこの支部長は異国の出身であるのだろう、恐らく先程の名乗りは字ではない。何故なら、通常字に姓がつくことはないからであり、また非常にシンプルな名であったからである。真名信仰の盛んなこの地の人々の名前は、字に限らず本名もまた自らを守護する神々や精霊の名を組み込むために非常に派手派でいい名前なのだ。私が名乗ったアトルディアもまた、そういった意味も込めて神殿から与えられた「渡り人」としての公の名である。純日本人が名乗るには似つかわしくない名だが、致し方ない。通り名は好きないように付けて良いと言われており、普段からそう呼ばれるわけではない事だけが救いである。

「アトルディア……ああ、町の北西にある滝の名ですね。元はそこに住む精霊の名だとも伝えられています。貴方はあの場に」渡られたのですね。」

「はい。」

渡り人の名の多くは落ちた場所に由来するらしい。その土地土地の神々や精霊が私たちに加護を与えるからだとされている。私も例に漏れず、落とされてプカプカ浮いていたその滝の名を与えられたのだ。元がその滝の精霊の名が由来であるから丁度良いだろう、とのことだ。そんな適当で良いのか、と思わなくもないが、神殿の偉いさんがそう言ったのだからきっと良いのだろう。

それにしても、と彼女は続ける。

「先程部下の非礼を詫びたばかりではありませんが……実年齢は二十二だと言われましたか。」

「はい、今はこんな形なりなので信じ難いでしょうが。」

「そうですね、”渡り人”が非成人である事はないと知っていなければ納得できなかったでしょう。それを分かっていても、失礼を承知で申し上げれば十を越えているようには到底見受けられません。」

まるで幼子を見るかのような 実際彼女としては似たようなものだったのだろう 柔らかい微笑を浮かべられてはなんとも言いようがなかった。

「……十歳以下、ですか。体感的には十三歳の頃の頃とそう変わらないように感じているのですが。」

純粋な子供にしては早熟に見られるであろう苦笑を浮かべつつ、そこだけはしっかりと主張した。もはや異世界トリップのテンプレではあるが、この国の人たちの多くが地球でのコーカソイドに近い事からも、より幼く見られるだろう事は十二分に有り得ると予想してはいたが、人からはつきりそう言われると地味に堪えた……。

私だって、好きで子供になったわけじゃないんだい……。望まぬ異世界トリップの上にガキ扱い……。本気でイジケても良いだろうか？

私はこの世界に来たときに子供の姿になっていた。恐らくは十二、三歳くらい頃とほぼ同等の身長なのではないかと思う。中一の時には身長伸びは緩やかになっていたし、以前よりは微妙に低く感じる視点からして然程ズレはないだろう。どういう原理かは分からないが、この世界にくるにあたって体はこの世界に最適化されるのだという。言語なども通じるのもその最適化された結果によるものなのだとか。通常は容姿がそう変わる事もないらしいが、極稀に容姿が変化する人や色彩が変化する人、中には種族すら変わってしまう人もいるらしい。そういう意味では、ただ単に若返った私はまだましな方であろう。

ギルドに登録するのに外見年齢では年齢制限に微妙に引っかかるが、実年齢は二十二だと伝えてあるので書類上は一応問題ない。その事はちゃんとギルド側にも伝えてあったはずなのだが、聞いてはいてもやはり実際に目にするのでは違うようだ。何より、私のように若返った”渡り人”も前例がなかったわけではないようだが、どちらかといえば珍しい部類であり、尚且つ成長を待たずにすぐにギルドに登録したものはほとんどいなかったと聞けば、なるほど、先程の驚きもおかしなことではないのだろう。そして、神殿の関係者が口をそろえてまだ早いのではないかと言っていたことにも頷けた。尤も、だからといってギルド登録を辞めるつもりは毛頭ないが、ギルド長もその事は分かってくれているみたいだった。

私を子供呼ばわり（外見はまさしく子供なのではあるが）してくれた若い女性　ミリアナ・ファレルというらしい　の淹れてくれたお茶を飲みながら話を進める。

とりあえず、私に関する簡単な説明、神殿で受けたさまざまな検

査や出身地、境遇に関してなどを話し終わると、早速登録のための書類を持ってきた。書類に印字されているのは日本語ではなく、それ以外の私を知る地球の言語のいずれでもなかった。だが、私はそれを読む事が出来た。この1週間のうちに神殿で教えられた事によれば、先に言った身体の最適化に付随する能力なのだそうだ。その人物が元々持っていた知識にこの世界のそれに同等する知識が関連付けされるのだと言う。

例えば元の世界で読み書き会話が出来れば、こちらの世界でも落ちた地域の国の主要言語の読み書き会話が出来るといったように。元々知っている語彙ならば理解できるが、知らない言葉を理解する事は出来ない。その点、日本人の”渡り人”は結構仕事面で優遇される事が多いのだとか。まずほぼ確実に読み書きが可能で、計算も得意、好みはどうあれ本を読む事は必要な勉強と言われれば然程苦としない。生憎、外見年齢のために当分私には縁のない話だが、日本人は各国の王族や神殿、大店に仕えることが多いのだという。これはコネも伝も何も無い”渡り人”の中では異例の待遇なのだとか。いずれ身体が成長した暁には、私もそんな職場に就職できれば良いのだけれど。何せ、王宮や神殿といえれば日本で言う政府であり、行政機関だ。この世界では王族は須らく神の子孫である。そんな彼らが国の中枢であり、政の担い手なのだから、当然、親たる神に仕える神官たちは行政機関の一員、言わば官僚、国家および地方公務員である。当たり前のことながら、給料も良い。

しかし、当然の事ながら見た目子供が就職できる先ではない。体が成長するまで数年待つ？私に限ってはありえない選択だ。故に、私は自活を目指すならギルドに登録するほかないのだ。勿論、成長する前に地球に帰ればそれに越した事はないのだが。

私が契約に関する条項を読み終えたのを見計らったのか、ギルド

長が口を開いた。

「さて、そちらの契約書に著名してもらえば貴方はギルドの一員となります。既に知っているとは思いますが、そうなれば、正式に貴方の身は神殿の庇護下から離れ、我々の預かりとなります。とは言つても、先程も説明した通り暫くの間は僅かではありますが最低限の生活を保障するだけの金銭、或いは物資が神殿から支給されますが。それでも、今までのように神殿が何から何まで全て面倒を見してくれるという生活は出来なくなりますよ？ 本当に、構わないのですね？」

「どちらにしても、いつまでも庇護下にいるわけには行かないのでしょうか？ それならば、私は早めに今後の生活になれておきたいんです。」

「わかりました。では、登録前に確認ですが、今の貴方には後見人はいないのですね？」

「はい。」

「この世界では、貴方の生まれた世界と違って血縁や地縁、コネや伝手と呼ばれる繋がりが非常に重視されます。後見のない身では何事もなせないその事をよく知っておいてください。では、”渡り人の通例どおり、ギルドが貴方の後見を務めるといふ事で構いませんか？”

「は

「後見は神殿で務める。」

あ？」

はい、と言い切る前に後ろから邪魔が入った。言わずもがな、あの男である。思わず引きつった顔を取り繕う余裕もなく振り返る。顔だけしか取得がないんじゃないかなるか？と常々疑っていた男は、至極真面目くさった顔でのたまった。

「後見には私になる。」

「ちょっと待ってください！私はギルドに頼むつもりで……」

「これは君を神殿から出す上での条件の一つだ。」

「聞いていません！そんなの。」

食って掛かろうとする私を制し、ギルド長が口を出す。

「それは、神殿の総意と見てよいのかしら？それとも、貴方一人の考え？」

「どちらとでも。」

明確に答えはしないが自信を持って言う。だが、勘でしかないがこれはこいつの独断だ。これを言うためにここまで来たのかと、ようやく私は理解した。

「神殿が条件だというならば、こちらとしてはそれを覆す手はあまりないわ。確かに後見役としては申し分ない相手ではあるけれど……」

「…」

「……変更は、難しいんでしょうか？」

「神殿側が納得するだけの後見人を見つけるには時間がかかるでしょうね。そうなれば、ギルドの登録自体も遠のくわ。」

「……分かりました。それでお願いします。」

ギルドが単純に後見するよりもはるかに多くの優遇措置が受けられるのだから、儲けものとも思っておきなさい、他の「渡り人」がどんなに望んでも手に入らないものよ、と微笑まれては何も言い返せない。私としては苦渋の決断だ。それでも、どうしても私には早急に仕事が必要だった。頑張りなさい、とエールを送ってくれたギルド長に挨拶をし、満足げな顔の神官と共にその部屋を後にした。

帰り際、1階で早速明日からの仕事を探すため掲示板を見上げた。先程通り過ぎたときよりも好奇の目は増えていたけれど、神官がすぐそばにいる事から見る以上のことはしてこなかった。からかわれたらそれも利用してやろうかと思っていたんだけど……本当に、過保護な人だ。

恐らく、今日中には子供姿の”渡り人”がギルドに登録した事は町中に広まるだろう。多少その情報を増やしてやる事は吝かではない。とりあえず、目当ての依頼の紙を神官にとって貰う。先に窓口へと進み始めた神官の眼を盗み、窓口へ行く前に、くるつと振り返りにっこり笑って一礼をした。案の定、好奇の視線を寄せていたギルド員たちの視線はしっかりと私に集中している。神官が、私が何かをしようとしていることに気付いて止めるためか近づいてくるのが目の端に映ったが、もう遅い。声が掠れないように、就職活動で鍛えたよく通る声を意識する。

「はじめまして、ギルド員の皆様方。本日、ギルドに登録しました、

異界、地球の日本から来ました”渡り人”アトルディアです。」

地球、日本という言葉に反応した人が何人か見えた。若干、好奇の視線に好意的な色が混じり始める。これは先人たちに感謝すべきなのだろう。極力、明るい声と表情を心がけながら後を続ける。

「読み書き計算は得意ですが、今のところ特殊能力は発現しておりませんので悪しからず。こんな形なりではありますが、一応れつきとした成人ですのでどうぞ宜しくお願い致します。」

よし、ちゃんと言えた！ 内心ガツポーズをしながら笑みを浮かべる。内容としては短めだが、気分的には就活の面接での自己アピールを無事終えたときに近い。呆気にとられている面々を尻目に再び一礼すると窓口にとつてかえした。何故だか後ろから笑い声が響いてきたが気にしない。無然とした顔をしている神官だって気にしない。

爪先立ちで背伸びをしながら 再び後方から爆笑が響いたけれど、以下略 窓口に依頼の紙と、先ほどギルド長に貰ったギルド員としての契約書の控えを出す。この契約書の控えが、ギルド証が発行されるまでの私の身分証明書となる。神殿から発行されている身分証もあるけれど、それではギルドの仕事は請けられない。故にこの一枚の紙切れは私にとっては大事な命綱だ。確認され返された契約書を丁寧にバッグにしまった。

そして説明されるのは契約の履行内容についての説明、これはもうテンプレ的な内容だから以下略。一つだけ違つとすれば、明確なレベル設定は存在しないという事。個人の力量を正確に測るのが難しい、というのは確かに理由の一つなのだが、ただ単純に必要ながない、というのが一番の理由だそうだ。

無茶だと思われる仕事なら一応ギルド側から注意が促されるけれ

ど、最終的には受ける受けないは個人の自由であり、出来なければ違約金を払うというたつたそれだけだ。それ故に失敗を繰り返す場合、信用の失墜は免れず、その影響は大きい。仕事を請ける受けないは個人の裁量に任せられると言え、評判が落ちれば依頼側からこの人だけはやめてくれ、と言われる可能性が出てくるわけだ。因みに、この評判は街の噂と言う形で人々の口に乗る。仕事上の信用問題だけでなく、人格の問題として扱われてしまう事もままあるため、当然無茶な仕事をする人と言うのは少なくなるので、レベル設定なんて必要ないのだそうだ。他の情報ソースがほとんどないとは言え、街の噂恐るべし、である。日本では人の噂も75日と言ったが、実際75日も仕事が出来なければ基本的に日雇いであるギルド員は日干しになってしまふ。そりゃ、自ずと気をつけるようになるってものだろう。

そんなこんなで、私も確実に出来るだろう仕事を選んだ。請ける仕事は単純に草むしり。期間は明日から1週間、場所もギルド本部近くの民家である。当然、賃金は低いが今の私ではこれがせいぜい。それでも、これが私のこの世界での第一歩だ。

神殿の保護下は安全で安心で、何もしなくても良い所だった。この世界に慣れるまで私を守ってくれた。

でも、何もせずただただ受動的に過ごす日々は、ふとした瞬間に地球のことを思い返させた。両親は、兄弟は、友人たちは、一体どうしているだろう。この世界に来てしまったことを認識するのに1日、理解するのに1日、地球を諦めるのに……まだ、私は諦め切れていない、とりあえず、現状を受け入れるのに1日、4日目には地球を 思い出した。

ふとした瞬間に家族を、友人を、残してきた様々なものを持った。

早過ぎるといわれた仕事の開始。でも、私は何も思い出す暇もなくいたかった。無理無茶無謀なんて、想定のうちだ。思い出してしまえば、泣かずにはいられなかったから、周りの人に当たらずにはいられなかったから、神を憎み恨み辛みを吐き罵倒し続けずに入らなかつたから、己の不幸に溺れ嘆きつづけずにはいられなかつたから、誰かを傷つけ、誰かから大切なものを奪わずには、この世界を呪わずにはいられなかつたから。何も感じずに眠りたかった。だから、私は小さくなつた体で無理を押ししても仕事を始めたかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0495ba/>

マレビト来たりて 前編

2012年1月4日06時46分発行